

# 日英両語の対照研究と日本語教育

—アメリカ人学生に対する

発音指導を中心に—

奥田邦男

---

## もくじ

- I. はじめに
  - II. 対照研究の方法
    - II. 1 日英両語の音韻体系の記述
    - II. 2 日英両語の音韻体系の対照
      - II. 2.1 かぶせ特徴
      - II. 2.2 子音および母音の対照
  - III. 困難度の段階
  - IV. おわりに
- 

## I. はじめに

日本語教育のための日英両語の対照研究は、それぞれの言語の相違点ならびに共通点を明らかにし、日本語学習上問題になる事からの性格を把握し、言語干渉によって生ずる困難点の度合いの測定、教材の効果的な配列などにとって欠かすことのできないものである。しかしながら、わが国のこれまでの日英両語の対照研究の多くは、主として、英語教育の立場からなされており、外国語としての日本語教育の立場からの、本格的な研究は、いまだ、未開拓の現状であるといわざるを得ない。わが国においても、近年、公私の国際交流が盛んになり、外国語としての日本語を学習しようとする外国人留学生が急増してきた。これに見合った、日本語教育プログラムの拡充、有能な日本語教師の養成、効果的な日本語教科書の編さん、日本語教授法の改善が切望される。

一方、海外においては、日本研究熱の高まりとともに、北米、ヨーロッパ、オーストラリアなどで、日本語教育がかなり普及してきたことは周知のとおりである。アメリカにお

いては、大学の外国語カリキュラムの中から、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語などと並んで、日本語を選ぶ学生もふえ、約40の主要大学においては、日本語学・日本文学等のプログラムにより、研究者の養成が行なわれている。ハワイ州では小学校から、カリフォルニア州の一部では、高等学校から、日本語の単位を取得することができるようになってきている。わが国における日本語教育の発展のためにも、これら海外の日本語教育サークルとの連携をさらに強める必要がある。また、アメリカ・イギリスの大学に見られる、きめの細かい外国人留学生の受入れ体制、なかんずく、外国人のための英語教育の分野から学ぶべき事がらが多い。アメリカの主な大学の大学院においては、1960年代初頭から、外国語としての英語教育の研究者、教師を数多く養成し、大きな効果をあげていることを考えると、わが国の外国語としての日本語教育の分野は、非常に立ち遅れていると言わざるを得ない。

わたくしは、1961年2月から1971年9月までの在米期間中、言語学・言語教育の研究に従事するかたわら、ハワイ大学(1962年9月—1963年1月)、カリフォルニア大学(ロサンゼルス校)(1963年2月—1966年6月)、モンレー外国語研究所(1963年7—8月)、オハイオ州立大学(1968年10月—1971年9月)において、日本語教育に携わった。また、1973年10月からは、広島大学の外国人留学生のための日本語講座の一半を外来講師として担当し、英語以外の諸言語を母国語とする学生の指導も行なっている。

日本語と学習者の母国語との対照研究は、当然、音韻部門、統語部門、語い部門、ひいては、文化の相違にわたって行なうのが望ましく、学習者の母国語が多岐にわたれば、それぞれの言語と日本語との対照研究が必要となってくる。本稿では、紙面の都合上、音韻部門に焦点をしばり、しかもアメリカ人が学習者である場合に範囲を限定した。なお、日英両語の統語部門の対照研究については、拙稿(1973)を参照されたい。

## I. 対照研究の方法

### I.1 日英両語の音韻体系の記述

目標言語(日本語)と学習者の母国語(アメリカ英語)の音韻体系の組織的な対照研究の前提として、当然、それぞれの言語の音韻体系の分析、記述が必要である。主要な作業の手順としては、(1)のような項目をあげることができる。

- (1) (a) かぶせ特徴(強勢・アクセント、リズムと長さ、イントネーション)の記述
- (b) 各子音、母音の調音特徴の記述
- (c) 音韻的対立(示差的相違)の発見 → 音素(phoneme)・示差的特徴(distinctive feature)の設定
- (d) 各音素のもつ異音(allophone)の記述、各異音の起こりうる環境制限の記述
- (e) 音節構造と音素の分布
- (f) 形態素(morpheme)中の音素の分布

(g) 語構成上の音変化

(h) 各音韻的対立の頻度(機能効率)の調査

これらは純粹に言語学的作業であり、独自の体系的な記述を行なうには、かなりの専門的な知識と訓練が必要である。したがって、現場の日本語教師は、信頼できる文献から、基本的な知識を学ぶのがよい。英語の音韻体系に関するものとしては、Black(1963)、Bronstein(1960)、Chomsky=Halle(1968)、笈・今井(1971)、Stockwell=Bowen(1965)など、日本語の音韻体系に関しては、Bloch(1950)、服部(1951,1960)、金田一(1971)、McCawley(1968)、NHK(1966)、日英両語にわたるものとしては、Kohmoto(1965)、太田(1965)、楳垣(1971)などをあげることができる。

## 1.2 日英両語の音韻体系の対照

日本語、英語それぞれについて、上述(1)の(a)~(h)の分析記述が終れば、次に、両言語間の音韻体系を対比することによって、共通点ならびに相違点を明らかにする。これによって、日本語のどのような音が学習者に困難を与えるか、また、どのような英語の発音習慣が日本語の学習の障害になるか、ということを予測することができる。こゝでは、詳細にわたる比較の内容について言及することはしないが、日本語学習上、特に問題になる点について重点的に述べてみたい。

### 1.2.1 かぶせ特徴

これは、発話の中の、子音とか母音とかいう分節要素を取り去った、強勢・アクセント、リズム、イントネーション・パターンなどで、日英語の間に大きな相違があるため、日本語を長年にわたって学習した学生でも「英語らしさ」が抜けきらない。

#### (i) 強勢・アクセント

英語は強勢アクセント言語、日本語は高低アクセント言語であることはよく知られている。最近の生成音韻論の研究によって、英語の語い項目には、どの音節が強められるかという情報を記しておく必要はなく、一連の一般的な強勢付加規則によって、単語、複合語、句・文の強勢の位置を予測することができることが明らかになった(Chomsky=Halle参照)。たとえば、下の(2)の諸例に見られるように、(a)3音節以上の語で、うしろの2つの母音がともに短母音で、その間に二重子音がなければ、強勢はうしろから3番目の母音に付加され、(b)うしろから2つ目の母音が長母音であるか、あるいは、(c)最後の短母音の前に2つ以上の子音があれば、末尾から2番目の母音に強勢が付加され、(d)それ以外の場合は(単音節語も含めて)最後の母音に強勢が付加される。

(2)	(a)	(b)	(c)	(d)
	América	horizon	agénda	Japanése hit
	cínema	Arizóna	amálgam	magazíne héat
	élegant	propósal	uténsil	decíde líst

また、[[police officer] union]<sub>N</sub>、[evening [phonetic class]]<sub>N</sub>などの複合語においても、統語的情報にもとづいて強勢規則が循環的に適用され、第1強勢、第2強勢などが自動的に付加される。こゝで注目すべきことは、英語の単語(複合語、句なども同じ)はすべてどこかの音節が特に強く発音され、日本語の平板型(無核)アクセントに相当するものが存在しないことである。したがって、ヒロシマという平板型の語も「ヒロシマ」とうしろから2番目の母音を長音化してそこを強めるのが普通で、訂正されれば、「ヒロシマ〜ヒロウシマ」とうしろから3番目の母音を強めてしまう。平板型の単語でできた文の高低ピッチ「アスノバン クルマデ トーキョーヘ カエリマス」などは、かなり上達した段階でも難しく、英語のアクセント規則の支配からなかなか抜けられないことを示している。また、日本語の場合、英語と違って、辞書にそれぞれの語い項目の固有なアクセント情報(すなわち有核か無核か、有核であれば、どこにアクセント核があるか)を記しておかなければならず、学習上の大きな負担として働く。なお、「ニチペイカンケイ」「トノサマガエル」などの一般的な複合名詞の場合は、複合アクセント規則によって後部要素の第1モーラにアクセント核がくるので、「ニチペイカンケイ」「トノサマガエル」のように強勢アクセントをつけても、かなり日本語らしく発音され、さほど困難を感じないように見える。しかしながら英語の強勢アクセントの習慣を排して、日本語の高さアクセントに習熟させるためには、音韻的な対立を示す最小対語(minimal-pair)による高低アクセントの練習(たとえば「花が高イ」〜「鼻が高イ」, 「呼ンデクダサイ」〜「読ンデクダサイ」など)を学習の初期にじゅうぶん重ねる必要がある。また、英語の強勢弱化と、それに伴う母音の弱化(たとえば, experiment [ɪkspɛrɪmənt]や organization [ɔrgənəzəʃən] など)の習慣は根強く、無意識に日本語の単母音を曖昧化してしまう傾向がある。(たとえば, キモノ → [kamów no\*])。このような英語の強勢アクセントのリズム、母音の曖昧化の傾向を克服するためには、日本語の単純ではあるが、高低アクセントによる明瞭な母音のリズムに乗る習慣を徹底させる必要がある。

## ii) リズムと長さ

英語は「強勢リズム」(Stress-timed rhythm)をもつものに対しては、日本語は「モーラのリズム」(Mora-counting rhythm)をもつと考えられる。強勢のリズムでは、(3)に見られるように、強勢のある音節がだいたい等しい時間的間隔をおいて現われ、その結果、中間の音節数が少なければ各音節は長く、強く、明瞭に発音されるが、中間音節が多くなれば、各音節は圧縮されて早く発音され、母音は曖昧化してしまう。

- (3) Mý wí fe ís ǎ téachĕr.  
 Mý wí fe ís ǎ gŏod téachĕr.  
 Mý wí fe ís ǎ vĕry gŏod téachĕr.

一方、日本語のようなモーラ・リズムをもつ言語では、モーラ自体がだいたい等しい長さを持ち、等間隔で現われるため、母音の調音もきわめて明瞭である。ここで注意しなければならないのは、日本語のモーラには「自立モーラ」(「キ」「シャ」などC(y)V)と「付属モーラ」(常に他のモーラに従属する長音「ー」、撥音/N/,促音/Q/)の2種類があり、日本語の音節は1つの自立モーラから成る場合(「キ」「シャ」と、自立モーラ+付属モーラから成る場合(「カー」「キン」「サッ」と)があることである。すなわち、「箱」および「高校」はいずれも2音節であるが、前者は2モーラ、後者は4モーラである。英語の「強勢リズム」の習慣からすれば、「高校」「三年」「結婚」「人生」などはすべて2音節の語としてとらえられ、4モーラの長さをもつ語として発音することに困難を感じる。この点で日英語は著しく異っており、英語の強勢リズムを克服して、日本語の「モーラのリズム」を習得するには、アクセントの場合と同様学習の初期に十分練習を重ねることが必要である。

### (iii) イントネーション

イントネーションの機能は、文の統語的構造を反映して発話に段落を与え、話者の心持ちや感情を表出する手段であると考えられる。一般に「下降調」(fallig intonation), 「上昇調」(rising intonation), 「平担調」(level intonation)の三種類が区別され、「下降上昇調」などの組み合わせも可能である。「下降調」は話が一段落したことを示し、「上昇調」はさらに相手の反応を期待し、「平担調」はまだ付け加えたいことが残っていることを示すなど、かなり普遍的で、感情表出の面からはあまり問題はない。対照言語学的に特に重要なのは、各言語に特徴的なイントネーションの習慣を発見することである。日本語学習上障害となると考えられる英語イントネーションの習慣としては、特に次の二点を指摘したい。まず、前述したように英語では強勢アクセントが用いられるため、日本語のように文(節)末に抑揚の変化が見られるだけでなく、文(節)中のピッチの高さが文(節)末の「下降調」「上昇調」と密接に結びついて変化する。

(4)

- a. Do you remember me? (文の途中から高くなり、文末で上昇する。)
- b. It's my brother who needs it. (文の途中から低くなり、文末で下降する。)

特に(4a)のような上昇調の習慣を日本語に持ち込むと、「オボエティマスカ(↗)」と言うべきところを「オボエティマスカ(↘)」となってしまう。

また、英語独特の習慣として、(5)に見られるような「引用」表現の場合、文末のイントネーションが文中の「引用文」自体のイントネーションによって支配されることをあげ

ることができる。(5a) および (5b) は、文全体は疑問文ではないのに「上昇調」になっていることに注意されたい。また、(5d) は引用文が「平坦調」であるため文の終りも平らである。

(5)

- a. "Do you remember me?" he asked.
- b. "You're hungry, aren't you?" she questioned.
- c. "I remember you." he said.
- d. "I want to go..." she hesitated.

日本語の場合、「『オボエテイマスカム』トタズネタ」のように、引用文は「上昇調」であってもそれが文末にまで及ぶことはない。このほか、'or' のついた選択疑問文、疑問代名詞のついたWH-疑問文、挙列の場合などのイントネーションが問題になるが、よく知られているのでここでは言及しない。上にのべたような英語特有の習慣が日本語の発音に反映されて、昇降の激しいオーバーな抑揚が聞かれるのであるが、日本語らしさを学習者に要求しようと思えば、文(節)末の抑揚によって語の高低アクセントを乱さないように指導し、「上昇調」「下降調」を軽く文(節)末だけにつける練習をすることが必要である。

## II.2.2 子音および母音の対照

言語の音相から、先に述べた「かぶせ特徴」を取り去れば、いろいろな分節の特徴(調音の特徴)をもった連続音が残る。連続音中の個々の子音や母音はさまざまな実相をもって、対立 (contrast), 相補性 (complementation), 音声的類似 (phonetic similarity), 同型性 (pattern congruity) などの諸原理によって、一定数の音素にまとめることができる。このようにして設定された音素はお互いに音韻的対立を示し、より大きい言語単位である形態素を構成する。

対照研究の手順として、日英どちらの場合でも、学習上の困難点を予測するために、普通、日英両語の音素目録の比較から行なわれる。下に掲げた<表1><表2>はそれぞれ英語と日本語の子音音素を表にまとめたもので、○印は日本語に、○印は英語に、音素として存在しないものを示す。<表3>は英語の母音体系(単純母音8, 二重母音9), <表4>は各母音の音韻的対立を示す具体的例である。<表3>に対応する<表5>は、日本語の母音体系(単純母音, 長母音, 二重母音)を示す。

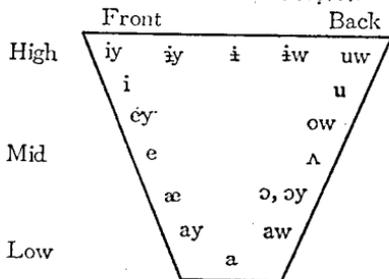
〈表1〉英語の子音音素表 (○印は日本語に音素として存在しないもの)

	labial	inter-dental	alveolar	palatal	velar	glottal
vl. stops	p		t	㉞	k	
vd. stops	b		d	㉟	g	
vl. spirants	㉡	㉢	s	㉣		h
vd. spirants	㉤	㉥	z	㉦		
nasals	m		n		ŋ	
lateral			㉧			
retroflex			r			
semivowels	w			y		

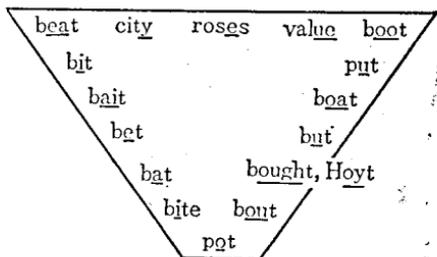
〈表2〉日本語の子音音素表 (○印は英語に音素としてないもの)

	labial	apical	palatal	velar	glottal	syllabic
vl. stops	p	t		k		㉡
vd. stops	b	d		g		
vl. spirants		s			h	
vd. spirants		z				
nasals	m	n		ŋ		㉢
flap		r				
semivowels	w		y			

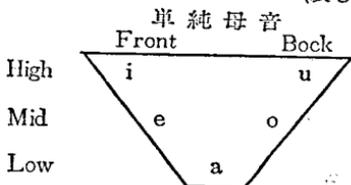
〈表3〉英語の母音体系



〈表4〉英語母音の音韻的対立具体例



〈表5〉日本語の母音体系



連母音

ii	ee	aa	oo	uu
ie	ei	ai	oi	ui
ia	ea	ae	oa	ue
io	eo	ao	oe	ua
iu	eu	au	ou	uo

上に掲げた日英両語の音素体系表の比較によって、確かに、日本語には子音 /f, v, θ, l, ɔ, ʃ, ʒ, ʒ/ や母音 /æ, ʌ, i, ɔ/ などが無いことがわかる。他方、英語には促音 /Q/, 撥音 /N/ が存在しないことから、これらが学習上問題になるであろうと予想することができるかもしれない。また、<表3>の英語の単純母音、二重母音はともに「単音節」であるため、日本語の長母音、二重母音も単音節化して発音されやすいこと(例: 「高校生」→ [kokose] など)、また日本語の単純母音が英語的に二重母音化しやすいこと(例: 「コレ」→ [ko'rei] など)も予想できる。しかしながら、実際には、日本語の1つの音素が英語にないことが、常にその音素を含む単語の学習を困難にするとは限らないし、逆に、日英両語に存在するある音素の発音、聴取は常に容易であるとも限らない。学習困難の原因の究明には、前述(i)の(a)~(h)の項目すべてにわたって、詳細な比較対照作業を行なう必要があるのである。ここでは、日本語学習上特に問題になる(i)語末および半母音の前に来る /N/ の調音、(ii)高母音の脱声化、(iii)語頭における [ts] の調音、(iv)単純母音の二重母音化、曖昧母音化について考察する。

### (i) 撥音 /N/ の調音

日本語の撥音 /N/ は、下の(6)に示したように4通りに発音される。すなわち、(a) 両唇音/p, b, m/の前では [m] (例: 「心配, 新聞, 新米」)、(b)歯茎音 /t, d, s, z, n, r/の前では [n] (例: 「反対, 寝台, 戦争, 心臓, 新年, 信頼」)、そして(c)軟口蓋音/k, g, ŋ/の前では [ŋ] (例: 「新婚, ガンガン, 戦後」)のよにう後続子音に逆行同化した鼻音として発音される。しかしながら、(d)半母音、声門子音 /w, y, ' , h/の前かあるいは語末に来る場合には、直前の母音と同じ舌の位置のまま鼻から息を抜いて発音される(例: 「神話, 本屋, 禁煙, 新發明, 見本」)。

$$(6) \quad \text{Japanese /N/} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [m] \text{ in env. — /p, b, m/} \\ [n] \text{ in env. — /t, d, s, z, n, r/} \\ [ŋ] \text{ in env. — /k, g, ŋ/} \\ [V_i] \text{ in env. } V_i \text{ — } \left\{ \begin{array}{l} /w, y, ' , h/ \\ \# \end{array} \right\} \end{array} \right\} \begin{array}{l} (a) \\ (b) \\ (c) \\ (d) \end{array}$$

学習者は、(撥音の長さは別として)その調音に際して、上に述べた(a)~(c)の場合はさして困難を感じない。しかしながら(d)の場合には大きな障害として働き、日本語らしくない歯茎音 [n] を代用して発音する(例: 見本ノ見セテクダサイ)。これは、英語にも上に見たような逆行同化によって/n/が [m, n, ŋ] と発音される習慣があるが(例: im-possible, under, finger), 非閉鎖音の前(例: inhalə)や語末では常に [n] であることに起因する。「記念, 近年, 禁煙」「子役, 婚約, こんにゃく」など対立を示す用例を駆使して、聞き取り・発音の練習を十分に行なわなければ、日本語の新しい習慣を身につけることはできない。

## (ii) 高母音 /i, u/ の脱声化

日本語特有の現象として、アクセント核のない音節の高母音、/i, u/ が、前後に無声子音があるか、あるいは語末に来る場合に、脱声化して [i̥, u̥] と発音される (例: ヒキダシ、クスリ)。すなわち、日本語には (7) のような音声規則がある。

$$(7) \quad V \rightarrow [-\text{voice}] \text{ in env. } \left[ \begin{array}{c} \text{-voice} \\ C \end{array} \right] \left[ \begin{array}{c} \text{+high} \\ \text{-Acc} \end{array} \right] \left\{ \left[ \begin{array}{c} \text{-voice} \\ C \end{array} \right] \right\} \\ \#$$

このような規則は英語に存在しないので、「マンネンヒツ、エンピツ」を「マネンヒツッ、エンピツッ」のように、有声母音のまま勢強まで加えて発音する。ここで強調したいのは、脱声母音の習得が単により日本語らしい発音に役立つだけでなく、「ヒキダシ、ヒカリ、ヒト」の語頭無声子音 [ç] の発音・聴取に欠かすことができないということである。学習者にとっては脱声母音の前の [ç] は聞き取りが困難で「\*イキダシ、\*イカリ、\*イト」のように子音を脱落させてしまう。

## (iii) 語頭における [ts] の調音

日本語の歯茎閉鎖音素 /t/ には3つの異音があり、/i/ の前では [t̚], /u/ の前では [ts̚], その他の環境では [t] が現われる。このうち、[t̚, ts̚] の調音には特に問題がないのに、[ts̚] の調音に困難を感じる学習者が多い。入門期によく使われる「コレハ ツクエデス。」<sup>生徒</sup>「コレハ スクエデス。」というやりとりが見られる。語中に現われる [ts̚] は、頭初多少困難を伴うが、やがて「イツツ・アツイ」と問題なく発音できるようになる。しかし、語頭の [ts̚] にはいつまでも摩擦音 [s] を代用して発音する学習者があり、困難度の高いことがわかる。このような障害の性格とその原因を明らかにするためには、学習者の音韻体系の分析の結果、英語には音素 /t/ の異音として [ts̚] は存在しないこと、英語のあらゆる形態素を調べても、1形態素内に [ts̚] 音が起こることはないこと、英語における音連続 [ts̚] が可能なのは2つの形態素が結びついて語を形成した場合に限られること (例: Let us → let's, hat+s → hats) が明らかになるであろう。したがって英語では [ts̚] (= /t+s/) が語中・語尾に現われることはあっても、語頭にくることはあり得ない。このような英語の音韻上・語構成上の制限が、日本語の [ts̚] 音の調音を困難にしているのである。ドリル教材の作成にあたっては、(1)最も容易な語中の [ts̚] 音 (例: アツイ・アツマル), (2)脱声母音を含まない語の語頭 [ts̚] 音 (例: 「ツヨイ・ツメタイ」), (3)脱声母音の前に来る語頭 [ts̚] 音 (例: ツクエ・ツトメル) のような難易度の位階付けによる配列を考慮に入れなければならない。

## (iv) 単純母音の二重音化・曖昧母音化

日本語の単純母音が二重音化されたり、曖昧母音化されたりすること、そしてこれらの問題が英語の強勢リズムおよび音節構造と深く関係していることはすでに述べた。日本語学習にあたって、これらの問題は根強い障害となるので、その原因を明らかにする必要がある。

ある。まず、英語の音節構造を分析してみると、英語には単純母音 /i, e, æ, a, ɔ, ʌ, u/ で終る語の存在しないことがわかる。母音で終る場合には、(1)二重母音であるか(例: he → /hiy/, no → /now/)、(2)弱められて曖昧母音になるか(to → [tə]) しかない。そのため、日本語の単純母音/i, e, a, o, u/ を発音する場合に前掲<表3>の二重母音 /iy, ey, (aa,) ow, uw/ を代用してしまう(例: 木 → 「キィ」、目 → 「メィ」、犬 → 「イヌゥ」)。また、英語には、強勢の付いた音節の前後の弱音節で単純母音が弱化して [ə] になるという、きわめて一般的規則(8)がある。

(8)

$$V \rightarrow [ə] \text{ in env. } \left[ \begin{array}{l} \text{---stress} \\ \text{---tense} \end{array} \right]$$

先にあげた「キモノ」→「kəmə'noʊ」などは、この規則の影響によるわけである。

ここに取り上げた(i)~(iv)のほかにも、子音および母音の対照で問題になる点として、日 /i, u/ と英 /i, u/, 日 /r/ と英 /r/ の違い、日 /r/ と英 /t, d/ の似かよ、英 /p, t, c, k/ の帯気性、促音の/Q/縮小化(「キテクダサイ・キツテクダサイ」)、などをあげることができる。日本語の音韻体系(音韻規則)の習得を根強くはばむ要因はいったい何であるかを、学習者の母国語の言語習慣の中から引き出すことは容易な作業ではない。学習者の犯す誤りに注目しながら、言語学的方法で組織的に対照研究を進めていくことが大切である。

## Ⅱ. 困難度の段階

Ⅰで述べたような対照研究の成果を、日本語教育の実践により効果的に活用することが望ましい。言語干渉によって生ずる問題点の難易度を一定の尺度で測定することができれば、指導の段階、教材の配列、重点の置きぐあいなどを決める目安とすることができる。カリフォルニア大学のStockwell=Bowen (1965, p.9f) は、次のような難易度判定の基準を提案している。まず、比較されるそれぞれの言語において、(1)音素間の選択が自由である(optional)か、(2)特定の位置によって条件づけられた異音を要求するか、音節・形態素内の音素分布制限がある(obligatory)か、(3)問題の音がその言語に存在していない(zero)か、を判定し、それら3種の選択(Op, Ob, φ)の組み合わせによって<表6>のような8段階の順位が決められるという。

<表6>

困難度 順位	Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ	
	1	2	3	4	5	6	7	8
母国語	φ	φ	Op	Ob	Ob	Op	Op	Ob
外国語	Ob	Op	Ob	Op	φ	φ	Op	Ob

Ⅰは目標言語の新しい習慣を学習する上での困難、Ⅱは母国語の言語習慣を排除する際の障害、Ⅲは母国語の習慣が容易に目標言語に転移できる場合で、興味深い提案といえる。

ところで、母国語に1つしかない範ちゅう（カテゴリー）を目標言語では2つ以上に分割して学習しなければならない場合は、全く新しい範ちゅうを学習する場合よりも困難であると思われる（たとえば、日本人にとって、英/l,r/を区別することは、英/θ, ð/などを新しく学習するよりも困難である）。下に掲げた<表7>のように、範ちゅうの対応のしかた（1：多の対応、対応範ちゅうのない場合、多：1の対応、1：1の対応）による段階付けも可能ではあるまいか。

<表7>

困難度の順位	範ちゅう	母国語	目標言語	学習の性質
1	範ちゅうの分割	1	2以上	母国語に1つしかない範ちゅうを、目標言語では2つ以上に分割して学習しなければならない。
2	新しい範ちゅう	0	1	母国語にない範ちゅうを、新しく学習しなければならない。
3	該当範ちゅうなし	1	0	対応する範ちゅうが目標言語になく、母国語の習慣を避けなければならない。
4	範ちゅうの統合	2以上	1	母国語の2つ以上の範ちゅうを、目標言語では1つに統合しなければならない。
5	範ちゅうの修正	1	1	両言語において類似しているが、詳細にわたって相違があり修正して学習しなければならない。
6	範ちゅうの転移	1	1	修正の必要なく、そのまま移転できる。

なお、困難度の段階付けに際しては、克服しようとする障害が、(1)伝達上誤解を招くような性質のものであるか、または伝達には支障ないが明らかに外国語なまりを相手に与えるようなものであるか、(2)機能効率が高いかどうか（すなわち、学習の影響が広範囲に及ぶかどうか）、などを考慮に入れなければならない。また、理論的に見た問題点とは別に、実際の日本語教室に現われる困難点の調査も必要である。入門レベルだけに現われ、やがて自然に消滅するような問題もあれば、上級レベルのクラスになっても共通にマスターできないような障害もある。滞日30年に及ぶアメリカ人宣教師などが犯すあやまちは、最も学習困難な範ちゅうとすることができる。そうしたあやまちの中に、日本語の特質を発見することができるといえよう。

#### IV おわりに

日本語教育のための対照研究は、言語学、国語学、教育方法学などの諸領域の研究成果をふまえて進めて行かなくてはならない。そこには、従来の伝統的な研究にとらわれることのない領域が存在する。日本語を、外国人学習者の立場を考えながら見つめ、いろいろな外国語と対比させることによって、新しい日本語研究が可能になる。これまで当然のこととして見のがしてきたことに、新しい意味を発見することもしばしばである。

(1974年8月23日稿)

#### 参 考 文 献

##### (邦文論文)

- 樺垣 実 (1971) 『日英比較語学入門』大修館。  
太田 朗 (1965) 「日英語の音体系の比較」『現代英語教育講座7』研究社。  
かげひ 寛 寿雄, 今井邦彦 (1971) 「音韻論Ⅱ」『英語学大系第2巻』大修館。  
金田一春彦 (1967) 『日本語音韻の研究』東京堂。  
日本放送協会編 (1966) 『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会。  
服部四郎 (1951) 『音韻論と正書法』研究社。  
——— (1960) 『言語学の方法』研究社。

##### (英文論文)

- Black, John W. (1963) American Speech for Foreign Students.  
Illinois: Charles C. Thomas Publisher.  
Bloch, Bernard. (1950) "Studies in Colloquial Japanese IV:  
Phonemics", in Language, Vol. 26: 86-125.  
Bronstein, Arthur J. (1960) The Pronunciation of American English:  
An Introduction to Phonetics. New York: Appleton-Century-  
Crofts.  
Chomsky, Noam, and Morris Halle. (1968) The Sound Patterns of  
English. New York: Harper & Row.  
Kohmoto, Sutesaburo. (1965) Applied English Phonology: Teaching  
of English Phonology to the Native Japanese Speakers. Tokyo:  
Yamanaka Shoten.  
McCawley, James D. (1968) The Phonological Component of a  
Grammar of Japanese. The Hague: Mouton.  
Okuda, Kunio. (1973) "A Contrastive Analysis of Japanese and  
English-The Verb Phrase", Bulletin of Hiroshima Jogakuin  
College, Vol. 23: 81-105.  
Stockwell, Robert P. and J. Donald Bowen. (1965) The Sounds  
of English and Spanish. Chicago: Univ. of Chicago Press.

(広島女学院大学助教授)